

(PDF版・1の2)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／4 教会の宣教』「二十二節 教会の委託—— キリスト教説教における神の言葉と人間の言葉」

(文責・豊田忠義)

「二十二節 教会の委託—— キリスト教説教における神の言葉と人間の言葉」
(21-31頁)

「一 キリスト教説教における神の言葉と人間の言葉」

三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）に引き寄せて言えば、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教〔説教と聖礼典〕があるとするならば、人間的な失敗を主権的な仕方で生かし給う神の成功〔「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方——すなわち「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づく「奇蹟」、「神的な成功の出来事」〕として理解されることができし、理解される……」。「われわれの時代およびすべての時代にわたって目撃する」ところの、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教の不幸、窮状、言語の混乱、無力さを、……教会の宣教の中での神の言葉が、文字通り溺れ死んで行く見渡す限りの不純な教えの海全体を念頭に置く時」、「教会の宣教は神の言葉であるという等置の成功」は、「ただ〔神の側の真実としてのみある、先行する〕神が成功し給うこと、ただ奇蹟〔「神的な成功の出来事」〕であることができるだけであるということを、われわれに〈思い出させる〉……」。このような訳で、「人間が、まことの神について現実の語るどころ、そこでは、イエス・キリストがその甦りの力の中で登場し給う」。「われわれ人間の更新を可能とするのは、今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある復活の力だけである」（『福音と律法』）。なお、イエス・キリストにおける神の自己啓示、啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉については、「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その1）〈イエス・キリストにおける神の自己啓示〉および〈その自己証明能力の総体的構造〉ならびに〈まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会〉」を参照されたし。

そのような訳で、神のその都度の自由な恵みの神的決断によるその「死と復活の出来事」としての客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」（客観的な「存在的なく必然性」）とその「啓示の出来事」の中での「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（主観的な「認識的なく必然性」）に基づいた「**教会の宣教のまことの<神性>を信じる信仰**〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事〕からして」、「**教会の宣教のそれ自身では失われた人間性の認識、……その失われた人間性の中での教会の宣教**」は、「**ただ教会の宣教の<神性>によってだけ、換言すれば**〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕**教会に贈り与えられた〔裁きを包括した〕神の言葉の恵みによってだけ**〔教会に贈り与えられた、主観的な「認識的なくラチオ性」〕としての徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性を包括した客観的な「存在的なくラチオ性」としてのそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）としての神の言葉の恵みによってだけ〕、**生きることができるという認識が従って来るのであって、それ以外のどこからもそのような認識は従って来ない**——第三の形態の神の言葉である「**教会は、〔実体ではなく、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、教会の成員である〕人間が神に聞くというこの一事によって——神が人間に語り給うゆえに聞き、神が人間に語り給うことを聞くというこの一事によって、基礎づけられ、支えられているのである。（中略）〔あくまでも<神のその都度の自由な恵みの神的決断による>「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕このことが起こるところ、そこではたとえ二人三人の集まりであっても、またこの二人三人が決して選り抜きの人でなくても、また高い水準にさえ達していなくても、またむしろ人間の層に属する者であるようなことがあっても、**教会は存在する**」、**それ故にそうでない時には、「どのような大群衆をその中に擁し、どのように優れた個人をその中に擁していても教会は存在しない。またそれが、もっとも豊かな生命を示し、国家と社会において、どのように尊敬されようとも教会は存在しない**」（『啓示・教会・神学』）。このような訳で、あの「**教会の宣教のまことの<神性>を信じる信仰からして**」、第三の形態の神の言葉である「**教会の中で奉仕する人間的な<宣教師>**」は、「**結局<人間的な>宣教師であることをやめはしないという認識が生じて来なければ<ならない>のである**」。すなわち、**全く人間的な「彼の語りは、あくまで神についての人間的な語り、あまりに人間的な語りであって、その〔「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身、具体的にはイエス・****

キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」、すなわち「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」としての第二の形態の神の言葉である聖書におけるイエス・キリストの「目標と目的に、それ自身では決して到達しない語りである」。

あの「**教会の宣教のまことの<神性>を信じる信仰からして**」、「神に敵対し神に従しないわれわれ人間は、肉であって、それゆえ神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持っていない」し、生来的な自然的な「『自分の理性や力によっては』全く信じることができない」のであるから、その現にあるがままの現実的な人間存在におけるわれわれ人間、「**その失われた人間性の中での教会の宣教**」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の「**総体的構造**」、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいてだけ可能となるということを経験し自覚した宣教である。この時、**教会の宣教における「人間的なものが、それがまさに〔裁きを包括した〕神の恵みにあずかることによって、その下に立っている人間的なものの生ける神の裁きである**」。「神ご自身が、……人間に向かって、人間は神について語ることはできないと言って責め給うこと、人間が神の言葉のもとに置かれて、ただ人間的な権威〔人間的な教育的権威〕と自由をもって語ることにしかできないということ」——「このことが、鉄則として圧して来るのであり、……純粹に正しく語らなければならないということについての気遣いを真剣な、難渋な、重大なものにするのである〔あの、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、あの純粹な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指すことについての気遣いを真剣な、難渋な、重大なものにするのである〕」。このような訳で、「まさにルターからしてこそ、カルヴァンの冷徹な命題、シカシコノ區別ハ、ハッキリサセテオカナケレバナラナイ。スナワチ、ワレワレハ、人間ガ自ラナシウルコトト〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動という〕神ニ固有ナコトトヲ記憶ニトドメナケレバナラナイ、が受けとられなければならない。「人間ガ自ラナシウルコトを思い起こすなら、主の祈りの第五の願いは確かにまた教会の中で、人間的な宣教者にとって欠かすことができないものであるであろう。なぜならば、モシモ神ガ〔裁きを包括した神の恵みにおいて、すなわち「今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけ

られ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある復活の力」において、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいて] ワレワレヲヒキ続イテ支エ給ウノデナケレバ、全認識モ、神学ソノモノモ、全ク役ニ立タナイデアロウ（ルター）、からである」。

「人が神について語るができないということ」が、「ただ一般的」な、「人間的な状況そのものの内在性」から、その「人間的な不可能性」から、「神秘主義」や「懐疑論」からなされるものであるならば、その「試練」は、現実的な「致命的な危険ではない」。自己自身である神としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質として「三位相互内在性」における三位一体の神の、われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（働き、業、行為）——すなわち「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにあつての「神によってその口が封じられる」「神から来る現実の試練」が、「現実の危険」、「致命的な危険である」。したがって、「神によってその口が封じられた人間は、どのような事情のもとでも、その口を…再び開けることができる」のは、その裁きを包括した「今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある復活の力だけである」、換言すれば「崩壊せずに、むしろ彼が意志しなすことの中で、支えられ、祝福されるであろう」「〔「限界づけられた間接的・相対的・形式的な権威と自由」としての〕人間的な権威〔人間的な教育的権威〕と自由」は、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」とによって賦与され装備された「権威と自由を持っている聖書の権威と自由の力による〔恵みに包括された〕裁きのもとでだけである」。何故ならば、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方である「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリスト自身、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉は、まさに聖書の形態の中で〔まさに「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」とによって賦与され装備された「権威と自由を持っている」ところの、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書の形態の中で、それ自身の比較

を絶した**権威**〔「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち**権威**〕と**自由**〔「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち**自由**〕……を持っており、またそのような**権威と自由**を持ち続けるのであり、そのようにして**神の言葉**は、その形態の中でこそ、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会**の中で、**人間的な……正当で、必然的な、権威**〔人間的な教育的**権威**〕と**自由**〔「限界づけられた間接的・相対的・形式的な**権威と自由**〕を基礎づけている」からである。「全くそれと同じことが必要ナ変更を加エテ、今度は、**教会の宣教**に耳を傾けるすべての〈聞くこと〉についても妥当する」。このような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会の宣教**の**人間的言葉**は、それとしてそれが**神の言葉**であるということと直面して、常に**試練**を意味している〔「**教会の宣教**の**人間的言葉**」は、それ自身が**聖霊**の業であり**啓示**の主観的可能性として客観的に存在している**第一の形態**の神の言葉である**イエス・キリスト**自身を起源とする「**神の言葉**の**三形態**」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における**第二の形態**の神の言葉である**聖書**を自らの**思惟**と語りと行動における**原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準**とした「**キリスト教的**語りの正しい内容の認識として**祝福**されたものあるのか」、「**きよめ**られたものであるのか」、「**怠惰**な**思弁**ではないものであるのか」という**試練**にさらされているということの意味している〕。「**試練**」は、「最高に隠された、しかし最高に**現実**のこととして起こる〔**恵み**に**包括**された〕**裁き**……のことである」。それは、「**教会の宣教**は**神の言葉**であるが故に」、「**神**は、人間に対して**恵み**深くあり給うことによって、**罪人**としての人間の**正体**を**暴露**し給うが故に」、「**神**は、人間を受け入れることによって、人間に対して**逆らい**給うが故に」、「**聞く者**たちが……〔**裁き**を**包括**した〕**恵み**のもとに立っている〔**恵み**に**包括**された〕**裁き**である」。したがって、「この**試練**の**克服**があるとするならば、その時にはここでもまた、われわれに対して**重荷**を課し給う同じ〔**恵み**深くあり給う〕**主**を通して、われわれは助けられなければならないのである」。「ナゼナラバ、真理ノ言葉ハ外面的ニハ肉体的な声ト奉仕ヲ通シテ人間ニ伝エラレルガ、シカシ植エル者モ水ソソグ者モ、共ニ取ルニ足りナイ。大事ナノハ、成長サセテ下サル**神ノミデア**ル（Iコリント三・七）カラ**デア**ル」、「ソレガ人デアロウト天カタノ使イデアロウト、話シ手……ノ語ルノヲ聞クノハ、ソコデ語ラレテイルコトガマコトデアルコトヲ見テ取り、知ルタメデアルガ、ソレハ彼ノ心ノ中ニ、（永遠ニトドマリ、暗闇ノ中ニアッテモ輝ク）光ガ注ガレルコトニヨッテ**デア**ル（アウグスティヌス）」、バルトによれば、それは、神のその都度の自由な**恵み**の**神的決断**による、**第一の形態**の神の言葉である**イエス・キリスト**自身を起源とする**第二の形態**の神の言葉である「**啓示**との〈**間接的同一性**〉」において現存しているその最初の**直接的な第一の預言者**および**使徒**たちの「**イエス・キリスト**についての**言葉**、**証言**、**宣教**、**説教**」としての「**啓示**ないし**和解**」の「**概念**の**実在**」である「**聖書**の中の**キリスト教原理**を、**覆い**をとつ

て明らかにする、キリストについて語るができる能力（ヨハネ一四・二六）であり、上からのよき賜物である」「聖霊の注ぎ」によってである。「神ガソノミ言葉ノ役者ヲ必要トサレル時、ソレハ神ガ小サクナリ給ウタトイウコトデハナイ。アルイハゴ自分ノカガ減退スルコトヲ許シ給ウタトイウコトデモナイ。神ハ与エルモノヲ失イ給ワナイ」。ちょうど、その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉、すなわち「神が人間となる」こと、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」となること、「僕の姿」となること、「自分を空しくすること、受難、卑下」は、「神性の放棄」や「神性の減少」を意味するのではなく、「神的姿の隠蔽、覆い隠しを意味しているようにである、「神ハソノヨウナ道具ヲ使ウコトヲ欲シ給ウ。タダソレハ、スベテガ神ニ帰スルコト、神デナイホカノ源泉カラ、タトエ一滴タリトモ汲ミ出サナイデ、スベテノ源泉デアル神カラ汲ミ出ストイウ条件デノコトデアル（カルヴァン）」。

「人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方である（ローマ三・四）」、それ故にわれわれ「人間の不誠実」によって、「神の誠実」が無にされることはない。われわれは、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会を、その主とただ間接的にだけ〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉を媒介・反復することを通してだけ〕、ただからだがその頭とひとつであるその単一性の中でだけ〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、その中での客観的な「存在的な〈ラチオ性〉」——すなわち、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として（聖書を媒介・反復することを通して）、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環にいて、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指すところで成立する、からだがその頭とひとつであるその単一性の中でだけ〕、同一視できる」。したがって、「そうでないとしたら、明らかにわれわれは教会および教会的権威〔人間的な教育的権威〕についてローマ・カトリック的思惟の道に逆戻りしてしまうことになるであろう」。したがってまた、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会（すべての成員）は、「教会の宣教の人間性は、正確に……ここで語る者も、ここで聞く者も、神の自由な恵みへと、それと共に祈りへと、さし向けられ、頼らしめられているということについて、われわれが明らかに気づかせられ、はっきりと意識していることが必要であ

る」——何故ならば、教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りと行動が、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、＜神ご自身の決定事項＞であって、われわれ人間の決定事項ではない」からである、それ故にそれは、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈り」の態度〕に対し神が応じて下さる〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立している」。ここで、恵みは、裁きを包括したそれである。

そのような訳で、「もしも彼らが祈りへと差し向けられているならば、その時、確かに彼らは、〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいたあの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において〕**真剣な、誠実なく仕事**へと差し向けられているであろう。なぜならば、もしも彼らが、ただ単に祈るだけであって、〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいたあの「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において〕働こうとしないならば、……彼らは本当に祈っている」ことにはならないからである。「もしも彼らが、無為な態度で、ただ自分たちのところに下る霊の満ち溢れ、あるいは既に自分たちのところに現臨する霊の満ち溢れに頼ろうとするだけであるならば、どうして彼らは祈っているであろうか。もしも彼らが、祈り求めている神の言葉に向かって熱心に、倦むことなく手を伸ばさないならば、どうして彼らは祈っているであろうか」、「まさにそのことでもって、……〔裁きを包括した〕恵みと祈りをそれほどまでに必要としている〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教の人間性を考察する際の抽象的な考察はあり得ないということが言われているのである」。バルトは、『説教の本質と実際』で、次のように述べている——「説教者は、説教として語る場合、聖霊が（あるいは別の霊であっても）言葉を吹きこむこととか、あるいは一つの構想を持っていることなどあてにしてはならない」、「説教は語ることであるが、……〔あの祈りの下で、「聖書への絶対的信頼に基づいて」、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準として、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、〕一語一語準備し、書き記しておいたものことである」。したがって、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返している東京神学大学の大学神学者の小泉健が、人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍の尊重を提唱し自然神学を温存させたルドルフ・ボーレンの「神律的相互関係」の概念に依拠して、それ故に聖霊や聖霊の言葉を説教者（人間自身）の決定事項として、「聖霊が説教者に言葉を与え、語ることへと導く。説教者は聖霊の言葉を伝え、

聖霊の言葉に導く」と聖霊や聖霊の言葉を実体化させた時、そのことは、その最初から必然的である「誤謬に普遍性と組織性の後光をかぶせて語った」ことを意味するのである。神の裁きを包括した「神の恵みに頼るように差し向けられ、〔裁きを包括した〕神の恵みなしでは失われ駄目になった人間、〔裁きを包括した〕神の恵みを通してまことに謙遜ならしめられ祈りへと導かれる人間は、……彼の謙遜にさせられた状態の中でも、……彼の絶対依存の姿の中でも、……神の前での彼の空しさの中でも、反抗的にあるいは気おくれしつつ、あくまで自分一人で孤立した中にとどまろうと欲することはできない」。何故ならば、そうでないとしたら、「彼はまことの裁き、〔神の恵みに包括された〕神の裁きに対して、まだ自分の身をさらし屈していなかったことを証明している」ことになるからである。人間による「人間的な無力さの絶対化」とは違って、「神の前での実際の人間的な無力さ」は、「神の前での無力さとして、……完膚なきまでの無力さである」。したがって、それは、「われわれが神から逃れることを許さない」それである。「現に本当に〔神の恵みに包括されて〕神によって裁かれるならば、その人間にとっては、まさに自分を裁く者を、したがって〔神の裁きを包括した〕神の恵みを、堅く取って離さないでいることしか残っていないであろう」。その時には、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的な〈必然性〉」と主観的な「認識的な〈必然性〉」、すなわち「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事において、裁きを包括した「神の恵みを信じること以外のこと以外何が起こることができようか」。「この転向〔方向転換〕の中には、実際、いかなる〔人間的な〕恣意も、いかなる〔人間的な〕要請もない」。何故ならば、「転向〔方向転換〕」の出来事を起こすものは、「われわれではない」からである。すなわち、復活（「勝利の福音」）に包括された「ゴルゴタの十字架の上でのあの完全な裁きが、すべての人間を虚言者として宣言しつつ、すべての口を封じつつ、われわれの身に起こったのである。そして、イエス・キリストが、死人の中から甦られたことによって、われわれは神の恵みの領域に移されたのである。この転向〔方向転換〕は、出来事として起こったとして受け取らなければならない。〈その光の中で〉……具体的に、われわれの人間性は、すなわち〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の宣教の人間性は、見られなければならないのである」。

起源的な第一の形態の「神の言葉の自己啓示と自己証言」は、第三の形態の神の言葉である「教会の中で隠れの中で起こること、その隠れを終わらせることあるいはただ一時的にだけでも開示するということは、われわれのなすべき事柄ではなく」、徹頭徹尾神の側の真実としてあるイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一

の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動の事柄であり、それ故にそれは、あくまでも神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいて「**神がなし給う事柄である**」。したがって、「**その中で、〔キリスト復活から復活されたキリストの再臨（終末、「完成」）までの聖霊の時代、中間時に現存するところの、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神言葉である教会の〕キリスト教的説教が神の言葉のこの自己啓示と自己証言を指し示すところの人間的な言葉のしるし**」は、「**ただそれらが神ご自身により、〔あくまでも神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的な「存在的なく必然性」〕としてのイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面（主観的な「認識的なく必然性」）としての、「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である〕聖霊を通して動かされ用いられることによってだけ、力を発揮して働くようになる**」。何故ならば、第三の神の言葉である全く人間的な「**教会は、とにかく罪人の教会であり、まさに神が〔裁きを包括した「恵み」をもって〕教会の語る言葉を認め給う時にこそ、いつも新たにそのような罪人の教会として明らかになるということがまぎれもない事実だからである**」。このような訳で、「われわれが、神について語り、また神について語られるのを聞くことを実際になすことができる」と考える時、それは、あくまで……神ご自身の行為がないならば、それをなすことに対して資格、認識、勇気はわれわれに必然的に欠けている敢為であり続ける」し、「**神については、結局ただ神ご自身だけが語り給うことができる**」。「それらすべてのことは、〔キリストにあつての〕**神が**〔**「教会に宣教を義務づけている」聖書を通して**〕**教会に対し神について語るように委託し給い、教会がこの委託を実行に移すことによって〔教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学が、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方**で〕、**神ご自身が自らご自分の啓示と証言を宣べ伝えるために、教会のただ中にい給う**〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の、「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、「啓示ないし和解」の「概念の實在」、「啓示との〈間接的同一性〉」において客観的に存在している聖書を媒介・反復することを通して、教会のただ中にい給う〕、**という積極的な命題に対する留保と解明であることができるだけである**」という認識と自覚が必要であることを意味している。

そのような訳で、「それらの実際にどうしてもなされなければならない留保と解明の一つ」は、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会〔すべての成員〕**」は、全

世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を現実的に所有することができるためになすところの、「その宣教の奉仕を遂行しつつ神について語る時、何らかの形で自負心に陥ってしまったり、自信過剰に身をゆだねることができないということを意味している」。したがってまた、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会が、「何らかの形で自負心に陥ってしまったり、自信過剰に身をゆだねる」ならば、その時には、「奇蹟はもはや奇蹟〔「神的な成功の出来事」〕でなく、恵みはもはや〔裁きを包括した〕恵みではなく、敢為はもはや敢為ではない」ものとなるのであって、そのような「イエス・キリストの甦りの力〔復活の力〕、聖霊の力から身を引こうとしている人間の反抗と小心な気おくれから出ている主張」、神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求（包括的に言えば自然的な信仰・神学・教会の宣教の欲求）もという「不遜な坊主根性は、実に教会がすべてのその他の敵にもまして鋭い形で戦わなければならない手ごわい敵である」。しかし、「教会のすべての成員」が、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「教義学的な合理主義を明確に否定し」、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動、キリストにあっての啓示、啓示の真理、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、啓示神学の立場に立脚しているならば、「それらの留保と解明は、……彼らの人間性全体の中で、神の言葉の宣教という神ご自身の業に参与するよう取り上げられ、受け入れられるという積極的な真理に対する妨害となることはできない」。包括的に言えば自然神学、自然的な信仰・神学・教会の宣教に対する「異議の申し立て」は、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（性質、働き、業、行為、行動）——すなわち「神の子〔まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である〕まことの神にしてまことの人間であるところの、起源的な第一の存在の仕方である父の子としてのイエス・キリスト自身」が、肉の中に入り給い〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方である言葉の受肉において、肉の中に入り給い〕、その聖霊を〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」聖霊を〕、教会に注ぎ給うたということ、「〔教会に宣教を義務づけている〕第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書を媒介・反復することを通して〕神について語るように委託が実際に〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会に与えられたということ……を通してなされる時に」、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた「ほかならぬ〈信仰〉から来る時に」、「ただそのような時にだけ、力強いのである」。その時には、それは、「われわれの高慢と小心に反対しつつ

働く……救いの力となる批判の力である」。「この批判の背後と上には、まさに……ゴルゴタの十字架の上で、また復活の朝に起こった転向〔方向転換、ベクトル変容〕……が立っている……」。「われわれは、この転向〔方向転換、ベクトル変容〕を、起こった出来事として、〔神のそのつどの自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事として〕信仰の中で受け取ることによって、あの救いとなる批判、大いなる試練をわれわれの身に起こらしめることなしではないが、とにかく〔裁きを包括した恵みによる〕その転向〔方向転換、ベクトル変容〕に、教会の成員としてあずかるのである」。「この転向〔方向転換、ベクトル変容〕を受け取るということは、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の人間性について、したがってわれわれ自身の人間性についてなされるすべての考察に際して、その無能力と無価値さ全体を通して貫いて、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の根拠と始まり、イエス・キリストにあつての教会の存在にまで視線を向けるということの意味している〔終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、その「死と復活の出来事」における「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書を媒介・反復することを通して、その聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方、その起源にまで時間を遡及するということの意味している〕」。その認識と自覚の行為における「そのところで、人間が神について語りことができ、実際に語るために起こらなければならない奇蹟（「神的な成功の出来事」）は、人間の身に既に起こったのである」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会が、そのところに視線を向けることによって、教会が、イエス・キリストを自分の存在として力を奮わしめ、したがって〔裁きを包括した恵みとしての、勝利の福音としての〕イエス・キリストを自分の慰めとして受け取ることによって、教会が、高慢な態度でも小心な態度でも、自分自身の人間性に固着せず、その人間性の中で自分に対し与えられた委託を堅く取って離さないでいることによって、教会は、平安のうちに、しかしまた最後の確信をもって、自分が、〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方において〕人間の言葉で神について語りつつ、神ご自身の言葉を宣べ伝えていることを公に言明し告白するであろう」。徹頭徹尾神の側の真実に根拠づけられたその時には、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会は、この言明と告白はあまりにも大胆で、尊大であるという避難を聞かなければならないとしても、そのことに耐えることができるであろう」。